

を維持した例は8例で平均観察年数4.5年と従来の報告より予後良好であった。これらの症例は血清クレアチニン値が2.0mg/dl以上となった群より尿蛋白量、平均血圧が有意に低値だったがHb-A_{1c}は両群に差を認めなかった。血清クレアチニン値2.0mg/dlを越えた後では経過良好群で尿蛋白量が有意に低値であったが経過不良群との間に血圧、Hb-A_{1c}には著明な差を認めなかった。

7) 当院に重症呼吸器感染症で入院した糖尿病症例について

倉島 賢二・桜井 金三
阿部 道行・飯泉 俊雄 (県立吉田病院内科)

糖尿病に重症感染症が合併したという報告はこれまでもなされたが、当院においても昭和63年5月1日から平成元年3月1日までに、重症呼吸器感染症を合併した4例を経験したので報告した。そのうち3例はいずれも1度教育入院後外来で血糖コントロール不良となり、呼吸器症状を来した後、急速に感染が進行し、致死的な大葉性肺炎および肺化膿症を来したものであった。他の1例は今回入院加療中、高血糖をきたし、全身管理と血糖管理の点で困難な問題が示された。

文献的には起因菌がGr(-)が多いとされているが、今回はGr(-)が1例、Gr(+)が3例であった。

他の合併症をもたぬ当院での呼吸器感染症患者の臨床像、入院日数で比較すると、やはりDMの感染防御力低下が伺われ、compromised-hostの感染症として早期に積極的な治療を開始することが重要と思われた。

8) 糖尿病性腎症の病期別における虚血性心疾患の頻度

石黒 淳司・津田 隆志
内分泌班一同 (新潟大学第一内科)

目的 NIDDM患者、および典型的な胸痛のないNIDDM患者の虚血性心疾患の頻度を検討した。方法 NIDDM患者67名について糖尿病性腎症の病期を尿中アルブミン排泄量の程度により3段階に分類して各段階において冠動脈硬化症の危険因子を比較検討し、負荷心筋シンチにて虚血性心疾患の有無を検討した。結果 NIDDM患者について高脂血症、高血圧、高尿酸血症については有意差を認めmacroに高い頻度で認めた。心筋虚血の陽性率は各群にて高値を示したが、心筋虚血の陽性率に有意差は認められなかった。典型的な胸痛の無いNIDDM患者において高血圧、高尿酸血症について有意差

を認めた。心筋虚血の陽性率はmicroに高頻度であった。結果 1. 典型的な胸痛の無い糖尿病患者において心筋虚血の陽性率はmicroalbuminuriaのほうがnormoalbuminuriaに比べて有意に高値を示した。2. macroalbuminuriaにおいて虚血性心疾患の冠動脈硬化の危険因子は高頻度になるが、虚血性心疾患の陽性率はmicroalbuminuria, normoalbuminuriaと比較して有意差を認めなかった。

9) 糖尿病に合併した眼筋麻痺の5例

高木 顕・矢崎 善一
草野 頼子・細野 浩之 (新潟市民病院
田中 直史・山田 彬 (内分泌代謝科))

10) 原則の重要性を示唆する糖尿病患者の1例

浅間 昌子・吉野 真理
高橋 千恵・寺沢 静子 (柏崎中央病院
鈴木 直美 (看護課)
品田 里美 (同 栄養課)
星山 真理 (同 内科))

11) 糖尿病における運動療法を試みて

田邨 信子 (燕労災病院4階西
病棟
4階東西病棟看護
岩崎 洋一・梨本いづみ 一司リハビリテー
テーション科医師)

糖尿病治療において、食事療法とともに、運動療法は大切である。

今回、私達は、運動療法の定量化をめざし、インスリン非依存性糖尿病入院患者10例を対象に運動療法を行い、血糖コントロールの改善をみたので報告する。

運動療法教育プログラムにそって、看護婦は、入院前の生活パターンを詳細に聴取し、リハ科への情報提供を行う。リハ科では、運動処方に基づき、一日2回、準備運動5分、筋力トレーニング5分、エルゴメーター20～30分、合計200～280calの運動を行う。又、プログラムの経過中にその人の生活パターンに即した運動をとり入れて、退院後も無理なく継続できるようにした。

以上のことにより、患者に自信をもたせ、闘病意欲を高め、血糖コントロールの改善はもちろん、良い自己管理へとつながった。